

壺井栄論 (21) 第九章 文壇復帰

A Study of TSUBOI Sakae (21): Return to the Literary World

鷺 只雄

SAGI Tadao

—

壺井栄が本格的に戦後の文壇に復帰したのは「屋根裏の記録」(50・1・1「中央公論文芸特集第二号」単・作・全・新全集に収録)によってであり、この作品は発表直後から世評高く、発表後直ちに日本文芸家協会編「昭和二十五年前期創作代表選集6」(50・10・10 大日本雄弁会講談社)に収録された。

「屋根裏の記録」にとりかかるときの三、四年間はいわゆる更年期症状というのであるが、私は心身ともに疲れはて、殆どねて暮らすような有様で、仕事もあまりしていない。だから、壺井栄は消えてしまったなどといわれたりもした。そんな時「中央公

論」から注文がきたのだから、うれしかった。どんなに長くてもよいから力作をと、その時の編集者永倉あい子さんにはげまされながら書いたのがこれだった。それにこたえた力作ですというのは恥かしいが、ともかくここに出てくる女たちのモデルは、私の少女時代から結婚するまで、つまり私が郷里の小豆島にいた時代に接した人たちが多く、その登場人物の中には十五歳の私もいる。妻に逃げられた男が血迷って打った電報を、官報にした無知な少女郵便員がそれだ。

「四つの作品の舞台」(51・6・5「壺井栄作品集7 屋根裏の記録」あとがき)

右の回想が示すように、作者にとっては文壇復帰をめざす千載一遇のチャンスであり、少女時代から熟知の素材を対象に思うさま腕

を揮った力作八十枚（四〇〇字詰め）がこの作品である。

時代はおおよそ大正時代の初めごろから敗戦までの約三十年間。小豆島の南端「S港」（坂手港をさすことは明白）のうどんや「おきん」は五、六人も人が入れば一杯の店であったが、その才覚によって酒を出し、女を置くことによって急成長をとげ、昭和の初めには「御料理 千鳥」と改め、隣家の土地を買い、泉水のある中庭をもつ料理屋として隆盛を誇る過程を詳細に描き、これがこの作の中心となる。結末は娘のコウは母の経営戦略を嫌って私生児を連れて町工場経営の男と結婚し、おきんの死後は諸悪の根源として千鳥を売り払うが、戦災で夫の鉄工所が焼けたあとに始めたのはおでんやで、母と同じ道を歩んでいることに苦笑するのであった。

次にこの作品が提示している問題について考えてみたい。

井一杯が五銭の「おきん」から、酒を出し、酌婦を置いた「千鳥」へと変わることによってそこにはどういふ変化が起きたのか、何が変わったのか、酌婦からの搾取の実態を明らかにしなければならぬが、その前に話の都合上、酌婦列伝あるいはそのタイプについて見ておいた方がわかりやすいと思われるのでそこから先に見ておきたい。

二

最初に来た酌婦ははるみで、高松の小料理屋などを転々としてきたたか考。父無し子の私生児で男のバクチの穴埋めに出嫁ぎに来たもので、半年後には前借金を払い、高松の男の所に帰ったがヒモつきの莫連女のタイプ。次に来たのが、おりき（30位）としいちゃん（15歳）母娘。姉妹のふれこみで特にしいちゃんのあどけない踊

りが評判となり、ブローカーに囲われるがひどい性病をつつされ、治療のため高松へ移るが、五年後再び島へ現れた時には別人の如く大酒飲みとなっていて前借も百円あり、こうなると請け出し手はなく、転々として転落の道をたどり、野垂れ死に型となる。

すま子は正直で無知、純情で淫蕩、欲ばりで恬淡、常に現在があのだけの典型的な遊び女で、目に二丁字もなく、代筆はいつもコウで、ある時次のような代筆をさせて「わたしやおまえにほづれん草、はやく、よめ菜に、しとおくれ」とやってコウにペンを投出させた。その相手と半年部屋を借りて同棲するが、親があわてて男に妻をあてがったために御破算となり、転落の道を歩む。

貧しい漁師の娘信子は同じく漁師の幸太郎に身請けされ、おきんは五十円の前借を二度払いにして話をまとめてやり、二人はよく働き、幸せになる。しかし一見幸せで何の問題もないかに見えるこの夫婦にも次のような問題がいくつもあるのだ。まず、貧しい漁師同士の子が無駄で高価な金と年月をつかって一緒になるという矛盾がある。第二に女の方は貧しいから嫁入支度をしてやれない家、男の方は貧乏故に嫁にきてくれない家という共に深い傷をかかえている。第三に男は買い手故その傷はすぐ癒えるが、女は永く、しかも生涯続く、徳利握り だつたし。

にもかかわらず、そういう 幸せ にでもすがらなければならぬのが酌婦たちの境遇であった。おきんは、千鳥の女たちをあわよくば嫁にしたいという下心をあらわにしてここに通ってくる常連の男たちの欲望をあまり、一方で女たちには結婚願望をけしかけ、店に通わせるのだ。そのロジックはこうだ、女は嫁に行ったものが勝ちだ、年をとって唄や踊りはできないのだから。この商売はからだでも

つけるほかに手はないのだから、それはしょうがない。けど、こんな商売は千鳥でおしまいにするんじや。うかうかしていると おふさやおかめ（村で最も古い酌婦上がりの方たちで、結婚の機会がなく、乞食のように暮らしていた）になるからうつ、といつもので、この作戦は功を奏し、すが目のしげ子は菓子屋の米吉に、おせいはい醤油屋勤めの松造に、キクエは同じく茂三郎に、おけいは出世頭で収入役の後妻になり、おきんの仲人は忙しかつた。中でもおきんを驚かしたのは、いかげやの久介が美人の小染を金の力で請出したことで、半月後には女が家出してちよんとなったが、桃枝という女も変わっていて前借はなく、一カ所に二カ月とはいわないで転々として店をまわり、巡査を極度に恐れ、のち警察にあげられるが元元は泥棒であつたという。

おきんの娘コウは裁縫女学校を出るが母に反抗して店には出ず、女たちの縫物をして過すうち、タクシー運転手の川井と恋に落ち、その後は母の采配を一切受けず店に出、酒に酔い、私生児多可史を生む、川井は誰の子か分かつたものではないと相手にせず、鉄工所を経営する福山松太郎の許へ多可史を連れて結婚し、千鳥はおきんの死と共に諸悪の根源として処分する。

三

次に酒を出し、酌婦を置く千鳥における酌婦からの搾取の実体について明らかにするが、既に紙数も大幅に超過しているのと、列伝の部分で大要は明らかと思われるので要約的に整理しておきたい。

先ず第一は前借であり、金しばりで身動きを出来なくする。但し、余り高額で、例えば百円になると高すぎて身請けは難しく、移籍も

困難となるのでその目利きが大事になる。

次は商売用の着物と装身具でこれは四季によって変わる。着物はおきんが反物で買い、それをコウが仕立て、しかも縫賃は仕立屋の二倍につけて前借の中につけこまれていく。

次は売春で、こうした特殊飲食店の女達にとつては「食わせてもらうだけが給金で、ちり紙一枚もからだで稼がねばならぬ」状況を強いられており、従つて売春料の配分の問題は最も肝要な問題である筈だが、この作品ではそれが娘のコウの視点から描かれ、しかも彼女は母おきんのこの商売を「諸悪の根源」として毛嫌いしているが故にその数字的実態はつまびらかにはできないが、しかし、千鳥が急成長を遂げて隆盛を極めたということ自体搾取のきびしさを物語るものであろう。

最後に身請け。夢も希望もなく、自墮落に陥っている酌婦たちを女は嫁に行つたが勝ち。そうしないと乞食になるぞ とおどし、結婚願望をけしかけて稼がせるこのやり方で店は女と客の両方から二重に儲かる仕組みになつていたのである。

ただし、この身請けについては一言付言しておく、搾取の一段には違いないが、しかし徹底して暗いこの作品の中で結果的には一つの救いになつてゐることも確かである。というのは作品の末尾でコウが二十年ぶりに小豆島に帰郷して小学校のクラス会に出席する際に宿として引受けてもらったのは、かつて千鳥の嫁であつた信子が嫁いでいる漁師の幸太郎の家であり、暖かく迎え入れられてゐるからである。

最後の問題は差別である。コウを幼時から苦しめた「姫」、あるいは「姫上り」とは酌婦を殊更に高貴な呼び方でどん底に突き落とす

蔑称であり、「私生児」もまた同様に屈辱のタネであり、さまざまな差別、偏見の中から女達の悲劇が生まれ、コウはそれを見続けながら彼女自身も又呑みこまれて行ったのである。例えば身売の女達という事ですま子もコウも信用されない、「姫」の信子はとっくりを握った女として生涯の傷を負い、コウのように妊娠を告げても誰の子かわからんとして相手にされず自暴自棄になってゆく女もある。そしてそれらの差別の全てを生み出す根源、あるいは、その象徴として三疊の屋根裏部屋が用いられているのである。

蛇足までにつけ加えておくと前引の「四つの作品の舞台」の中で栄は「屋根裏の記録」の中で「うつつたえたかつたものは戦争反対であったと思ってる」と記しているが、これは出来上がった作品と作者の主題・思想とが乖離している典型的な例ということになると思われる。

というのは分量的に言っても全三十三頁のこの作品で、多可史の名が末尾の三頁に出てくるのみであり、しかも内容的に見ても、一人っ子の多可史を中心としたどんな家庭も描かれてはいないのだ。夫も子も不明であり、家庭は不在である。そういう家庭に失うべき一体何があるのか。戦争はそういう家庭からかけがえのない何かを奪ったというのであろうか。強弁というほかはないであろう。

四

「晒木綿」(50・1「新日本文学」単・作・全・新全集に収録)は祖母が孫の名前朝江を役場に届けながら戸籍係と村長のからかいで戸籍上はトラとされながら無学故に祖母はそれと知らず、ために

朝江が受けてきた恥ずかしい思いの数々と、サラシのオシメもままならぬ戦後の物不足をコント風を描き、「春の雪」(50・3「働く婦人」再刊32号 新全集に初収)は内職で徹夜しながら家計を支えている病気持ちの母を見ながら家事を全く手伝わぬ父を24歳の働く娘の立場からきびしく批判して、父に仕事を割り当てるが、うまくゆかないとすぐやめてしまい、母もそれを許しているのを見て娘は一層がなりたてる。が、失業中故に娘に批判されて家事の手伝いをしている父の心中をふと思つて以後は追い立てることはやめるというもので、亭主の家事への非協力、あるいは暴君ぶりをユーモラスに取り上げている。

「わだち」(50・7「世界」全集に未収・新全集に収録)はある運送店の戦前の苦闘と戦後の繁栄を通して世相の一端を切り取って見せる五十八枚(四〇〇字詰め)程の作品。

場所はそこ明示してはいないが、栄が住んでいた中野区鷺宮と推定され、そこに昭和十二年日本通運を辞めて独立し、田村運送店をはじめた七五郎夫婦が主人公。開店した時は一郎から三郎までは小学生、四郎は五歳であったが、後に五郎が生まれ、子供達が学校を卒業して家業を手伝ってくれる日の来るのを楽しみに夫は大八車を曳き、カミさんはそのあと押しをし、特に妻は真っ黒になり、老けて前歯がなく、三十五歳といつても誰も信じない程なりふり構わず働いた。

夫婦が特に苦労したのは子育ての食料の事で、いくら稼いでも食べ盛りの五人の子供達に満腹させるのは、戦争末期と敗戦後は大変で、つい弁当を出してくれるお客の方の荷物を先にしてしまうこともしばしばで、届先が農家の場合にはしつこくねばって食料を手

入れた。

戦争による疎開と戦後の疎開先からの帰京、更にタケノコ生活は運送業にとつて空前の活況をもたらし、食いたいものが食えたわけではないが、貯金は増える一方で、店の二軒長屋一棟と裏の空地を買い、オート三輪の他、リヤカー二台、自転車は五台となっていた。そしてこの仕事の活況を支える原動力はぞっくり揃った男五人の子供達であり、兵隊になった二人の子供達も怪我一つなく無事に帰ってきて両親を助けてくれた事で、この事は大きい。今、母は身体は使わずに、見積もりや采配を振るえはよい。

そういう田村夫婦が見てきた人生哀話の中から、二つ紹介すると、一つはピアノニスト井川夏子で、田村運送店のカミさんがまだ繁盛する前に、夏子に生活の苦しさをグチッたところ、ある時払いの催促無しで三十円を貸してくれ、それを元に新しい自転車を買った時のうれしかったこと。カミさんには井川夫妻にそういう忘れられない恩義があったのだが、やがて井川が出征し三人の子をかかえた夏子のピアノ教授生活も行き詰って岡山の実家に帰ることになり、二台あるピアノのうちグランドの方は送ってもらい、もう一台は送料としてくれるということがあった、送ったピアノは空襲で焼けて届かず、運送代としておいてゆかれたピアノは田村の家の隅にあった。敗戦後三年目に夏子が帰京してきた時七五郎夫婦は「こんちわ。毎度有りがとうございます。お荷物がまいりましたア。」といてピアノを届けると、夏子はカミさんの「首っ玉にしがみついてわあわあ泣き出した。」という一幕もあった。もう一つは没落家族の話で、木田家は七十近い老人（足腰は立たない）と、息子（戦死）の嫁の清子とその子浩（小学生）の三人が二〇〇坪の土地に三十五坪の家

に住み、タケノコ暮らし。清子はおとなしい一方のお人好しなので、出入りの古着屋の立田の言いなり放題。フランス製の応接セットで三万円以下ということはないしるものが五千円というありさま。おまけに応接間にあるものは「机も三角櫛も全部」運び出させ、清子はそのような約束はしていないと思うがそれを言い出せず持ち出され、とうとう家屋敷も売り、20坪の土地に12坪の家に引越してゆく。

以上、田村運送店の歴史を戦前・戦中・戦後とたどり、そこに井川家と木田家を配して明確に浮かびあがって来るものは何かと言えば戦争であり、それは国民の生活をまるごと支配し、一家の浮沈・盛衰・運命を意のままに操る。

戦争によって引き起こされる疎開や帰京等の移動は一般の国民にとつては多大の出費であり、負担には違いないが、一方これを運送業者の立場から見れば歓迎すべき商売繁昌、お家安泰の源泉なのである。

また、戦死者、特に一家の大黒柱を失った家は井川家、木田家のように境遇は一変し、転落する。対照的に、戦死者を出さずに働き盛りの復員者を迎えた家は田村家のように繁昌を謳歌することになるわけで、作品は対比的な構図の中に戦争の悲劇、一家の浮沈が描かれるが、瀬沼茂樹が「創作月評」(50・7・12「日本読書新聞」)で「この運送屋は直接人の心に通じるものをもっている佳作」と評したのは適評であらう。

「棧橋」(50・9「群像」単・作・全・新全集に収録)は小豆島生まれの柿原千代の半生 大正末から昭和十年代を背景に十歳で母代りとなり、弟の兵太を連れて小学校で勉強し、師範に行きたかったが、それもならず貧乏故に汽船会社に雇われて「チヨン」と馬鹿

にされながらも成長してゆく。旅館の娘ミユキは成績は一番で女医志望ながら貰い子で一つ年下の勝治の嫁にと予定されているところから女医はあきらめ、嫁になるかと心をきめた頃義父から迫られ始め、義母からは嫉妬されて島を飛び出し、行方知れずとなる。看護師の姉のあとを追って大阪へ行ったともえは免状はとるが結核となり、死ぬ。弟の兵太は千代の援助で師範学校を出て生徒にしたわれる教師となるが、治安維持法違反で高松の刑務所に送られてしまう。

中村光夫は「創作合評」(50・11「群像」)の中で教員の弟が治安維持法違反で捕まったりするのは取ってつけたような感じでない方がよく、「ああいう瀬戸内海か何かの港町の風景、若い女がいろいろに育って行くというそれを書いてもらっただけでいい作品になったのじゃないかと思う」と評しているが、首肯される見解であろう。

「木かげ」(50・11「展望」 新全集に初収)は飼猫ユキについて、その来た経緯・利口な性質・出産・隣家の息子に空気銃で撃たれて後足が立たなくなるまでを描いて家族の一員としての愛情を示している。

「羽ばたき」(50・11「婦人倶楽部」 全集に未収・新全集に収録)は新制中学の娘がいる浅江の若い日の二度の駆け落ちを回想形式で語り、自分の娘たちはもはやかつてのように駆け落ちなどはしそうな事を感じする。

「日が照り雨」(50・11「女性改造」 単・作・全・新全集に収録)については前稿(壺井栄論)20(一)の「二」章で述べたのでそちらを参照願いたい。

五

次に一九五〇年の児童文学についてみておきたい。

「グロープ」(50・2「潮流」 新全集に初収)は昨日一夫が隣家のヒロシに漫画の本を借り、代りに野球のグロープを貸すが、それを返してもらっていないことに気づいてとりに行くと、寝ていたヒロシは急に思い出せず、父にどなられて泣き出し、怒った父は一夫の手を引いて五百円で買って返す。母はあわてて五百円を返しに行くが相手はとりあわないので、新しいグロープを買ってきて一夫の父と話している処に隣家の母が笑いながらやってきて空の方を指すので見ると、なんと子供たちが毎日遊ぶ桜の木の幹の二つに分かれた処にグロープがひっかかれていたというもので、朝の騒動から三人の子供(一夫の弟にも)が思いがけず皆自分のグロープをもてたという話で、表面的には一往めでたしめでたしであるが、その根本には敗戦後日本の子供たちが皆グロープをもてるわけではない貧しい現実があるからで、手はなしで喜べないところに問題の根の深さがある。

「木の上であるすばん」(50・4「少年少女」 全集未収・新全集に収録)は藤男が二歳の時に出征した父が小学二年となった今も未帰還で、女一人縫物で家計を支えてきた母は家計のため昼も富士の置薬をして働き、息子も友達に頼んで置薬を置いてもらって食いつなくという窮状を描き、「ひとりっ子と未っ子」(50・10「小学三年」 児文全集4に初収・新全集に収録)は 右文もの の一つで、おとなりのなかよしの友ちゃんとけんかの「コマをスケッチして見せ

る。「鹿太郎」(50・12・28「神港新聞」新全集に初収)は島の日曜日、郵便局長の家で男の子が生まれ、鹿コレラで絶滅したと思われていたのに折柄灯台に二頭の鹿が現れたと聞いて喜び、局長は鹿太郎と名付ける。

「オリーブに吹く風」(64・12・20 児文全集4に初出。新全集に収録。本来は50年頃「少女の友」からの執筆依頼で送稿するが、二年たっても掲載されないので原稿をとりもどし、児文全集4に初出)は上述の発表の経緯からすれば「少女の友」編集部によってボツにされた作品で、その理由はつまびらかにはないが、後年の作者の推定では「終戦直後のはでになった世相にあわなれと思われたらしく、一年たっても二年めになっても発表にならず、とうとう原稿をとりかえしました。そして、十何年後の今年、「壺井栄」児童文学全集出版にあたって見つけたし、はじめて活字になりました。」と不合格の烙印を押されてお蔵入りになった事情を伝えているが、実は節穴だったのは編集部の方であり、この後世に残る秀作を見落としてしまったのだ。

この作品は中学生の二人の少女の眼を通して描かれ、その眼に映るふるさとの小豆島はオリーブのかおる風光・南欧的な風土・大勢の画家たちが競って画材を求めにくる島・夢の国等々、平和であり、穏和であり、この世の楽園、ユートピアのイメージであり、また、そこに住む人の心は暖かく、思いやりがあつて、おきのさんのように高齢で天涯孤独、火事に住む家もなくなつてしまつた人が出た場合には、早速村人の善意によつて一夜この宿を提供されるというようにまさしく絵に描いたような善意の救済が行われて一見何の問題もないかに見える。しかし、それはあくまで表面的なキレイゴト

にすぎないのであつて、善意・善行にひそむ残酷さを節子の母は鋭く指摘するのだ。母は節子にこう言う。

「いっとくけども、おきのさんにこつちから歌をうたえなぞ、いつちやならんよ。」

思わずだまつてうなずかねばならぬほど、おかあさんの目はきびしく、声はひくいのです。

「ほうほうで、おきのさんにつたえうたえとゆうとるそうなが、おきのさんは「ゴゼじゃないんだから、だまつてしずかにねたいばんもあるだろうし、ねさせてあげる家もあつたほうぐええから、な。」

「まるで回覧版のようにつぎからつきへと送られて、一日ごとに寝床のかわるくらしをせねばならない」おきのさんの境遇を思いやつて母はきつぱりと「おきのさんは「ゴゼじゃない」と断言することによつて、村人たちの歌をもとめ、話をせがむ心ない要求をしりぞける。それは何故か。眼が見えなくなり、家が燃えてしまつたおきのさんにとつて一夜の宿を与えてくれる村人の要求はことわりたくてもそうすることはできない性質のものである。ゴゼではなくてもゴゼを勤めなければならぬ時もあるのだ。言いかえればこの作品は人間の善意に基づく一夜の宿制度にひそむ残酷さにスポットをあてて人間の尊厳を問う作品であるからである。

次にエッセイや座談会等の雑文も含めたものについてみておくところの年は余り目立ったものがないが「座談会 小林多喜二の死とその前後 出席者 小林セキ・小林三吾・江口渙・原泉子・壺井栄・貴司山治など15名」(50・2)「新日本文学」単・作・全・新全集に未収)は19頁に及ぶ長いものだが資料的な裏付けがなく、各自の記憶に頼っているため、折角大勢生証人を集めながら所期の成果は上がっていない。栄は二度 死を報じた夕刊で百合子の家から多喜二の家にいった時の様子と、刑務所での面会の節にそれをいかに伝えたかを話している。

「新婚・銀婚」(50・5)「文芸読物」単行本に収録。作・全・新全集に未収)は昔と今の若者達の結婚式の決め方や進め方を比較して合理的で身分相応なのに気がついて讚嘆したもので、日取りの決め方も、先負だが日曜日なので出席者の都合を考えてきめ、花嫁の着る物も着物の無駄と新婚旅行の時間から割出してスーツにし、披露宴はアルコールぬき、新婚旅行の費用も新世帯の道具類も全て二人で揃えたというつましいもので首尾一貫まことに頼もしいと推奨。

「楽しみあれこれ」(50・5)「新文苑」単・作・全・新全集に未収)は草花づくりや毛糸の編みものや夫婦げんかや親子げんかを徹底的にやるのも楽しみだが、一寸自慢なのが「二八」会で、月の二十八日に集まって晩御飯を食べる。常連は山本画家と常安女医夫妻・佐多稲子・壺井夫妻で会場は持回り、お客を1〜二人呼ぶ楽しい会

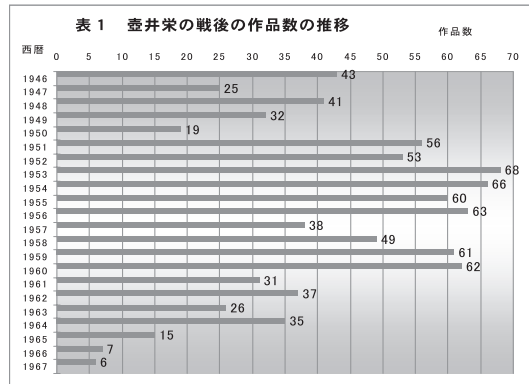
で、今月は伊藤武雄・花子がゲストの予定になっていると披露。

「予防注射」(50・9・23)「家庭朝日」単・作・全・新全集に未収)ではこの時期丁度モラルの転換期であり、その悩み 旧来のカミナリオヤジ式にすれば子供は反発して家出するし、かといって要領よくやれとも言いにくい。家の六歳の子がま新しいタモ綱を持ってきたのももしや人のを盗んできたのではないかと思っただなりつけ、もとの森に返させたところ、実は近所の小父さんからもらったものだとかわり、再び子供はもとへ戻って見たが、持主はもう別人であった。他に「女の意地悪さ」について(50・10・28)「婦人民主新聞」単・作・全・新全集に未収)「お年玉」(50・1・6)同上 単・作・全・新全集に未収)もあるが紙数も尽きたので省略する。

七

栄の文壇復帰は昭和二十五(一九五〇)年からで、その栄をになつたのは「屋根裏の記録」であり、続く「わだち」であったことについては前述したとおりであるが、その事を数量的に裏付けるのが執筆の飛躍的な増加である。文泉堂版栄全集12巻所載の「著作目録」で毎年毎に記載されたものを雑文、座談会の類もひっくるめて一点として数えて示してみると、表1のようになる。

この再起の年の第一作が「からかねの樋」(51・1・15)「別冊小説新潮」。「裾野は暮れて」に初収。新全集に収録)で明治から大正にかけての小豆島を舞台に古着屋の次男春吉は劣をいとわぬのを見込まれてからかねの樋は村で一軒という大身上の小判屋の婿となる。



れ子の藤子を長男春樹の嫁にするという条件で迎えた。この結婚で初めて春吉は妻のよき、寄りそう女のよさを知り、清美が生まれる。舅、姑の死により春吉は家督を相続するが、不動産の半分以上はミサオに譲られていて彼を驚かした。春樹との結婚を藤子は嫌う中、春吉は急な病で倒れて死に、藤子と節子は「よってたかつてがんじがらめにする家なのよこは」と言っ二人で去る。

「家」の存続を第一とする考え方の悲劇が春吉とおりきの仲を引き裂き、姉が死ぬとミサオは婚約者があってもそれを捨てて後妻になるという犠牲を強いられ、養父母は財産を用心深く半分以上は娘の名義にしておく。しかしそうした小細工も娘の早死によって烏

実は春吉には将来を誓った豆腐屋の娘おりきがあり、妊娠していたのだが、小判屋の婿の話に色めき立った母と兄の説得に負けてこれを捨てた。妻の小ふねは幼時に脳を患って少々足りない上に身体も弱く、四人子供を生んで死ぬ。

その間春吉は日露戦争で片足を負傷して足を引くようになる。義妹のミサオには婚約者もあつたが、小ふねの死により結局は家の犠牲となつて後妻となり、二人の子を生んで死ぬ。次に第三の妻ふさを連

有に帰し、あてにしていた娘は長男との結婚を袖にして家を出るという具合に、まるで「家」の思想に挑戦し、これを嘲笑するかのよな筋の運びとなつてゐる。

これは勿論、戦後の新生日本を生きる若い世代に作者が期待する願望を寄せたものであろうが、小説としては最後の藤子と節子の家出は唐突で実態のない書き割りと言わざるを得ない。その意味で、この作品は序章であり、のちの「草の実」「袖原小はな」の下書きとみるべきかもしれない。

「振袖と野良着」(51・2「婦人公論」単・作・全・新全集に収録)は隣家に花嫁が来て近所まわりをしているのを見、仲人に人形のように手をひかれ、ニコリとせす腰を曲げるのを見ていたら、あんなのはさつさとやめて二人そろってよろしくとまわるような日がくるのはいつの事かと思ひ、又、「主人」に代わる「民主的(?)」な言葉はないものかと探してみたところ「つれあい」という「男女同権的」「共々に助け合つてゐる夫婦の言葉」が見つかったのでこれを推奨したいとして、二組の老人の恋、老いらくの恋を披露する。

一組は与之吉(68歳)が同じ一人暮らしのおはる(62歳)の所に世帯道具を背負つて居つた話。もう一つは七十二歳の藤屋のはあさんが六十六歳の福さんに付け文を送つてデートを申込み、双方とも子や孫がいて一緒には住めないでデートが見晴茶屋の時はずどんやきつねずいで過し、二十三夜待ちの時にはばあさんの手作りを染しむのである。既に紹介した「三夜待ち」(40・5「日の出」と同系統の作品で、ある根源的なつかしさと大らかさを感じさせるものである)。

「めみえの旅」(51・4「小説新潮」単・作・全・新全集に収録)

については前稿(壺井栄論[20])で述べた。「曇り日」(51・5)「日本評論」(新全集に初収)は自殺したH(原民喜をさす)の告別式に参列したあとの次々に目にする憂鬱な事件 駅のホームから見たトイレからひきあげられた嬰兒の死体、留守に来た小豆島出身の學生が結核で明日帰郷と聞き、両親から預かっていたお金を届けに西荻まで行き、下宿のおかみから亭主のグチ、息子の自殺未遂と陰々滅々たる話のベタ塗りを聞かされて読者に救いはない。

「右文覚え書」(51・6・15 三十書房)、「朝靄」(「右文覚え書」収録) いずれも新全集に収録)については前稿(壺井栄論[20])で述べたのでここでは繰り返さない。

「静か雨」(51・8)「新日本文学」(単・作・新全集に収録)は大正から敗戦後までの三十年間、七人の子(うち三人の男子は戦死)を育てながら働き続けて死んだカツの生涯を描いたものだが、そこには貧しい故にカツは一生に一度位は五個の卵で作った卵焼きを食べてみたいと思ひ、それが出来るようになった時には喉頭結核で食べられないという貧の悲劇、それから戦争で死なせた三人の息子達には何一つ望みや願いをかなえてやらなかったことへの後悔など三人の子を奪われた戦争への憤りなどがたどられるのだが、率直に言つて筋書きばかりで、ふくらみに欠ける憾みは否定できない。

八

栄の作家としての展開、発展を考える上で一九五一年(昭和26)に発表した「私の花物語」(51・8・19)同・12・23「週刊家庭朝日」(単・作・新全集に収録)は見逃すことのできない重要な意味

をもつ作品である。毎回読み切りで、一回は八枚(四〇〇字詰)の長さという超短編小説 ちなみにこれを掌編小説とする呼称もあり、その代表的作家は川端康成である。で全19回連載したところ、これが好評ですぐ発表誌を変えて「続私の花物語」(52・1・1)同・5・4「婦人民主新聞」(単・作・新全集に収録)として全十五話連載、一回の枚数は更に短く五枚であった。続いて大衆芸能娯楽雑誌「平凡」に「私の花物語」(54・2)55・8 各回八枚前後 単・作・新全集に収録)全19回、同誌に「続私の花物語」(56・1)57・3 単・作・新全集に収録)を全15回連載し、更に表題を一字改め「私の歌物語」(57・9)58・11 単・作・全・新全集に未収)として全15回連載した。

その詳細は表2}4に整理したので参照していただきたい。表2の「週刊家庭朝日」「婦人民主新聞」「平凡」に連載したものは毎回読み切り、一回完結の掌編小説であり、表3の「平凡」連載の「続私の花物語」(全15回連載)はこの形式だけからすると毎回読み切りのように見えるが実際はそうではなく、一人のヒロインが連続し、苦難にめげず成長する物語である。表4は発表時には花物語とは無関係であったが、後に栄が花物語の本を編む際にその一篇として収録したものの、従つて作品の分量、長さの点で表2のものから比べれば四、六倍の違いがあるであらう。

ところで、栄が花物語を書くいきさつとはどういふものであったのか、何故書いたのか、花物語に熱中し、のめりこんだのはどういふ事情があつたのか、それについて考えてみることにしたい。まず栄の発言「花物語の秘密」(65・10・30 ポプラ社 壺井栄名作集9「私の花物語」あとがき)から見てゆくことにしたい。

表2 壺井栄が「私の花物語」と題して連載した毎回読切りの作品
 * 栄の「私の花物語」で初出以下を確認したものは次の通り。
 * 「全集」は文泉堂版壺井栄全集をさす

	初出掲載年月日		初出原題	全集タイトル
1	「週刊家庭朝日」 私の花物語	1951.8.19 (昭26)	フレンチ・マリゴールド	フレンチ・マリゴールド
2		1951.8.26	花かんざし	花かんざし
3		1951.9.2	ママこのしりぬぐい	ママこのしりぬぐい
4		1951.9.9	美女なでしこ	美女なでしこ
5		1951.9.16	ハギ	萩
6		1951.9.23	麦の花	麦の花
7		1951.9.30	みやまははこぐさ	みやまははこぐさ
8		1951.10.7	さくら	さくら
9		1951.10.14	合歓の花	合 <small>なむ</small> 歓の花
10		1951.10.21	ひめゆり	ひめゆり
11		1951.10.28	ゆきわり草	ゆきわり草
12		1951.11.4	鳳仙花	ほうせん <small>か</small> 花
13		1951.11.11	山茶花	さざな <small>か</small> 花 (B-小説・梅子もの)
14		1951.11.18	うっこんこう	うっこんこう
15		1951.11.25	ばら	ばら
16		1951.12.2	紫苑	しあん <small>苑</small>
17		1951.12.9	寒つばき	寒つばき (B-小説・房子もの)
18		1951.12.16	尾花	尾花
19		1951.12.23	赤い花	赤い花
1	「婦人民主新聞」 続私の花物語	1952.1.1 (昭27)	右近の橘左近の柿	右近の橘左近の柿
2		1952.1.13	春蘭 (ほくり)	ほくり 春蘭 (A - 小説)
3		1952.1.20	麝香豌豆 (スイートピー)	じやくかうえんとう 麝香豌豆 (スイートピー)
4		1952.1.27	のうぜんかつら	のうぜんかつら
5		1952.2.3	たんぼぼ	たんぼぼ (B-小説・私もの)
6		1952.2.10	白梅	白梅
7		1952.2.17	菜種	菜種
8		1952.3.2	ぼうぶら	ぼうぶら
9		1952.3.9	しのぶぐさ	しのぶぐさ
10		1952.3.16	みやまれんげ	みやまれんげ
11		1952.3.30	えにしだ	えにしだ
12		1952.4.6	わするなぐさ	わするなぐさ
13		1952.4.13	ざくろ	ざくろ
14		1952.4.20	芙蓉	ふよう <small>芙蓉</small>
15		1952.5.4	しろつつじ	しろつつじ
1	「平凡」 私の花物語	1954.2.5 (昭29)	福寿草	福寿草
2		1954.3.5	かんつばき 寒 椿	かんつばき 寒 椿 (C-小説・三津子もの)
3		1954.4.5	シネラリヤ	シネラリヤ
4		1954.5.5	ねこやなぎ	ねこやなぎ
5		1954.6.5	じんちようげ 沈 丁 花	じんちようげ 沈 丁 花
6		1954.7.5	すみれ	すみれ

	初出掲載年月日		初出原題	全集タイトル
7		1954.8.5	矢車草	矢車草
8	初出は「9」と誤記 以下終りまで同じ	1954.9.5	むらさきつゆくさ	むらさきつゆくさ
9		1954.10.5	われもこう	われもこう
10		1954.11.5	やぶかんぞう	やぶかんぞう
11		1954.12.5	オリーブ	オリーブ
12		1955.1.5	南天	<small>なんてん</small> 南天
13		1955.2.5	ひなぎく	ひなぎく
14		1955.3.5	水仙	水仙
15		1955.4.5	スイートピー	スイートピー
16		1955.5.5	カーネーション	カーネーション
17		1955.6.5	<small>あんず</small> 杏	あんず
18		1955.7.5	こでまり	こでまり
19		1955.8.5	月見草	<small>つきみそう</small> 月見草

表3 「花物語」と題して連載するも毎回読切りではなく、主人公が連続する作品

	初出掲載年月日		初出原題	全集タイトル
1	「平凡」全15回連載 (初出誌は第12回を14回 と誤記したため、以下 ずれて最終回が17回と 誤記)	1956.1.5 (昭31) ~1957.3.5 (昭32)	続私の花物語	小さな花の物語 (B - 小説・ 一子もの)

表4 「花物語」とは無関係に当初発表されるが、後に「花物語」の一篇とされたもの

	初出掲載年月日		初出原題	全集タイトル
1	「婦人公論」	1939.9.1	たんぼぼ	たんぼぼ (A-小説・珊瑚もの)
2	「社会圏」	1948.5.1	白いリボン	白いリボン ³
3	「女性改造」	1949.5.1	二人静	<small>ふたりしずか</small> 二人静
4	「婦人倶楽部」	1950.11.1	<small>は</small> 羽ばたき	<small>は</small> 羽ばたき
5	「新女苑」	1951.11.1	竹子	竹
6	「婦人公論」	1952.3.1	<small>らっかしよう</small> 落花生	<small>らっかしよう</small> 落花生
7	初出未詳		へびのだいはち	へびのだいはち
8	「主婦の友」	1954.10.1	<small>やま やど わたし はなものがたり</small> 山の宿 私の花物語	山の宿
9	「オール読物」	1954.10.1	やまほととぎす	やまほととぎす (B - 小説)
10	「週刊朝日別冊」6号	1955.6.10	あさがお	あさがお
11	「オール読物」	1955.10.1	<small>まつばぼたん</small> 松葉牡丹	<small>まつばぼたん</small> 松葉牡丹

花物語と言えば、だれでも思いだすのは吉屋信子さんのあのうつくしい花物語の数々であろう。明治から大正、昭和と三代にわたって、若い日本の女性たちに愛読されたときいている。ところが若いころ読書階級でなかったわたしは発表当時にそれを読んでいなかった。この有名な作品を知らなかったのだ。そして五十歳にちかづいた終戦直後になってはじめて読む機会をえた。ラジオでこの作者とおたがいの作品について語りあつたことになり、それで本をあたらされたからだ。きけば、吉屋さんはこれを十代のころから書きつづけられ、それをあつめた書物は何十年後の今日まで母子二代にわたっての読者をもっているということだ。わたしはそのことにもおどろいたが、花物語そのものの「あえかな」うつくしさにもびびりしてしまった。いなが育ちのがさつなわたしなどの、とつて想像もできない、うつくしい、きゃしゃな女の人たちのことを、豊富なかさつたことばでえがいている。たとえば「銀のきざしをさんこの玉がころがるような声」といったような表現にみちているのだ。戦後のあのはげしい時代に、現実の生活とははなはだしくかけはなれたこの花物語が、またあたらしい読者の心をつかんだということには、わからぬわけではなかったが、国じゅうが飢えや戦争犠牲者にみち、わたし自身もまた戦争のうんだ孤児を育てたりしていたせい、このたくさんの読者をもっているという花物語を読んだわたしはある意欲をもって「私の花物語」を書きたくなくなった。書かねばならないと決心したといったほうがほんとかもしれない。

こうしたきっかけて書きだしたわたしの花物語を最初に発表し

たのは、朝日新聞社からでていた週刊誌「家庭朝日」で、一かい八まいづつ、二十かいた読みきり連載であった。この形式で「婦人民主新聞」「平凡」「明星」などにも連載した。(中略) この作品は書きだすまえにひそかにわたしが意図したことが、思いがけず大ぜいの人たちに受けいれられたらしく、「二十四の瞳」について読者の反響がおおかつたし、そのいく編かは労働組合の機関紙に再録されたりしたこともあつた。はたらいっている若い人たちを主人公にしたものがおおかつたせいかもしれない。わたしがこの物語のながであつた女の子たちは、ほとんど中学校だけを出ていきなりはたらいっているか、せいぜい定時制の高校生だし、そうでなければなんらかの意味で不幸をせおっている人たちや、それうちかつていくけなげ者である。現実のうえでそんなふうにははこばなくても、そんなふうにはこばせているものはこばせなければならぬ境遇にいるもの、つまり未来を信じて生きていかなければならぬもの、そついったことを書きだかつたのだ。

長い引用になつたが、本稿で問題にしたいポイントを絞つて整理してゆくと、栄が花物語を書くきっかけは吉屋信子の花物語であつた。吉屋の花物語は一九一六年(大正5)「少女画報」に読切小説として連載が開始され、一九二五年(大正15)まで足かけ十年にわたつて(末期の数編は「少女倶楽部」に連載)執筆され続け、愛読された。では栄は愛読者であつたのかと言えば、この点が大層なのであるが、そうではなかつた。それを知らずに、読まずに第二次大戦後まで来る。そして敗戦後の「昭和二十年頃」(栄「生活の雫」

56・12・5 壺井栄作品集10あとがき 筑摩書房) ラジオで吉屋信

子と対談してお互いの文学について語り合うことになり、事前にNHKから花物語を与えられて始めて読んだからであった。

その印象は「花物語」そのものの「あえかなうつくしきさにもびつくりしてしまった。いなか育ちのがさつさなわたしなどの、とつてい想像もできない、うつくしい、きゃしゃな女の人たちのことを、豊富なかざったことばでえがいている。たとえば「銀のきざしをさんこの玉がころがるような声」といったような表現にみちているのだ。」

これはまことにきびしい批判であり、激しい挑戦状である。何故ならここで言われている栄の本音を社会的儀礼をとり払って言えば信子の花物語は若い女性の弱々しくはかなげな美の姿を描いたものであり、その世界の女性たちは田舎者の栄などには想像もできない華奢な存在で、それをきらびやかな言葉で飾り立てていて、一言で言えば今日的生活現実からは全く遊離した虚妄の虹の世界であると断罪したものであるからだ。

それに続いて言われるように敗戦の破壊と疲弊、混乱と絶望、虚無と頹廢の渦巻く中で至る所に戦争犠牲者があり、日本人の一千万人が餓死するだろうと言われ、栄自身も戦争の生んだ孤児を育てていて、生きるか死ぬかの激しい時代に、現実の生活とは全くかけはなれた信子の花物語の存在すること自体が許せなかった。そのためには「ある意欲をもって『私の花物語』を書きたくなった。書かねばならぬ」と決心した」という。「生活の毒」(前出)ではこの時のことを「こう言っている。私は、一種はげしい思いで、どうしても私は『私の花物語』を書かねばならないと決心した。何もそう対抗的に考えなくてもよかつたのだらうが、そのときとしてはたしかにそう思ったのである。」

その結果出来あがった作品はどういうものであったか。

ヒロインは若い女の子たちで、殆どが中学校だけを出て働いているか、せいぜい定時制の高校生であり、そうでなければなんらかの意味で不幸を背負っている人たちであり、それにうちかかっていく健気者たちへのエールであり、応援歌である。現実にはそういう進行にしなければならぬ境遇にあるもの。つまり未来を信じて生きてゆかねば生きてゆけないものたちのために支えとなり、はげましとなり、生きる目標となるものであった。

吉屋信子の花物語が虹のように美しく、夢のようにあえかな、温室咲きの花々とすれば、栄の花物語は温室ではなく、雨や風に吹きさらされ、そこできたえられる野の花であり、そういう花のたくましさ、美しさを書いたものであった。

人間でいえば、やっとな義務教育をおえただけで社会に放り出され働くしかない貧しい人たちの生きてゆく姿を彼らによりそって支え、はげますものであり、そこに自らのレーソン・ノートル(存在する意味がある)と信じた栄の決断と行動が駆りたてたものと言ってよいであろう。

それ故に多くの読者の共感と支持を得て永く各紙・誌に連載されたのだと考えられる。

九

次に51年の児童文学について見ておきたい。数的には少ないが、長編があるので量的には少なくない。まず、「みえ子のしっばい」(51・5・20「婦人と家庭」112号 週刊 新編日報社 新全集に初収)は小豆島の坂手村が舞台と思われ、小五のみえ子はいたずらっ子で、何を言ってもケンカにならない同級生のサッチャンを驚かし

てやろうと先まわりして家のかけに隠れてウワツとやると、やられたのはサツチャンではなく、その家のおばあさんだったたのでカンカンにおこられてサツチャンに手をひかれて帰るといふ失敗談。珍しいのは、栄の性格からして他人にしかける攻撃性、能動性からの失敗談はないわけで、その点でこれは唯一の異色作といってもよいのであるが、あるいは出入りしていた知人の代作ということも全く考えられないわけではないので、そのことを一言申し添えておきたい。

「坂道」(51・6 「少年少女」 単・作・全・新全集に収録)は屑屋で生計をたてながら大学の夜間部に学び、将来は弁護士をめざす堂本(20歳)が引越の時に遭遇した二つの問題 一つは屑屋への差別の問題、もう一つは自分の家の動物さえかわいがればそれでよいとする狭い、誤った動物愛護精神を鋭く批判した作品で、発表当時から話題になり、評価の高い作品である。ちなみに、この「坂道」と「母のない子と子のない母と」に対して翌年四月、第二回芸術選奨文部科学大臣賞が与えられた。最後に、栄がこの作品の成立について興味深いエピソードを記しているので紹介しておきたい。

「坂道」は中央公論社から出ていた「少年少女」に発表されたものであるが、原稿を依頼されたとき、じつはしめきり当日までなにを書くか見当もつかぬまま、うろたうろたしていた。そこへ友人の丹野節子さんが遊びに来て、その道すがら見てきたという犬のけんかの話をきかしてくれた。おまわりさんまではいつての子ともたちとのやりとりがたいそうわたしの胸にひびき、「この話わたしにちょうどいい。」と丹野さんの了解をえて、さっそく書きだした。そして、原稿をとりにもえた編集者の藤井田鶴子さんにつくえのむこうで待つて

いたきながら、みじかい時間に一気に書きあげた。(中略)モデルとしては丹野さんにきいた犬の話だけで、あとは創作である。ただもうひとつ強いていうなら、そのころわたしの家へときどき商売できていた無口な少年くす屋がいたのだが、この少年とはべつに商売がいいのことはかわしたことはなかった。(中略)だがある日、この少年があたらしい自転車をはいて商売にくるようになり、そのうちだんだん身なりなどもとのつてきたなと思っているといく日かの後ついにすがたを見せなくなった。そういう思い出が犬の話とつながって、わたしに「坂道」を書かせたのであった。

(「思い出の老人や子どもたち」あとがき) 65・10・30 壺井栄名作集4 坂道 ポプラ社)

「ねずみの歯よりもはやく」(51・10・28 「婦人と家庭」135号 週刊 新潟日報社 新全集に初収)は幼時の歯が抜けた時に、下の歯は屋根に、上の歯はえんの下に投げて子ども歯とどちらが先に生えるかを競争させる 昔からの風習 最近はまだないのであろう を巧みに描いたもので、何気ない一瞬の光景が永遠の一瞬になるような錯覚を覚えさせる。

敗戦の翌年に「少国民新聞」(のち「毎日小学生新聞」と改題)に連載した「海辺の村の子どもたち」(48・7・1 雁書房)はそれにとつてかねてから「不満だらけの作品」で、折あらば書き直さねばならないと考えていたところへ、光文社の神吉晴夫から長篇の注文があり、信州上林温泉の宿でそれにとりかかった。一九五一年(昭26)七月から九月のことである。そして出来上がった作品が「母のない子と子のない母と」(51・11・10 光文社)であり、反戦

平和へのメッセージが強く訴えられた作品となった。

翌年、これにより昭和二十六年度の第二回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。両作の分析、検討については既に前稿において詳述したのでこちらを参照願つこととし、「こゝではそこで述べられなかったことをいくつか指摘しておきたい。

「母のない子と子のない母と」は若杉光夫監督、久坂栄二郎脚本、北林谷栄（おとらおばさん）・田中晋一（一郎）・宇野重吉（父）・高野由美（母）らの出演で映画化され、一九五二年（昭27）十一月四日に封切られた。これは今日判明しうる限り、栄作品の中で最も早い映画化第一作の作品である。ただし、独立プロの作品であったため、殆ど評判にならなかった。実は「二十四の瞳」を大ヒットさせた木下恵介監督が「母のない子と子のない母と」を映画化しようとして著者に申し込んだときは一足違いで民芸に映画化権をとられてしまい、地団太踏んで悔しがったというが、もし木下がやればあるいはこちらが、ポピュラーになっていたかもしれない。これにこりて木下は次の「二十四の瞳」では本を読むと直ちに電報で映画化の申し込みをし、首尾よく権利をえている。

次にモデルについての詮議がかまびすしいが、それはない。背景として小豆島と埼玉県熊谷が出てくるが、これは作者の郷里が小豆島であり、熊谷には親戚の者が住んでいたから便宜的に用いたもの。鴻巣の農事試験場が出てきたりするのも同様で、戦時中軍部から作家に田植えの手伝いをさせられた体験があつて鴻巣に行った時の記憶がよみがえつたものである。

モデルといへば、そのくらいのこと、実在の人はほとんどい

ない。しかし、「二十四の瞳」の場合でもおなじだが、この作品に出てくるような戦争から難をうけた人は、日本じゅうにたくさんいたはずだし、そういう人たちが苦難にめげずに、あすのためにたちあがろうとする力を信じたい、そんな思いをこめて、この作品は書かれたと思つてゐる。

第二回文部科学大臣賞受賞については次のような二つの問題があつた。一つは「母のない子と子のない母と」（光文社）という長篇と、「坂道」の入った短編集（中央公論社刊）とが偶然、選考委員会で賞の候補になるという結果になり、二つ並べるのもどうかというこゝとで、どちらを主にし、どちらをその他にするかで意見が二つに分かれ、文部科学省では「坂道」を主とし、「母のない子と子のない母と」とをその他にしたことを、坪田譲治は明らかにしている。¹⁰

この事と微妙にからんでいるのが第二の問題で、戦争反対をテーマに掲げているこれらの作品が、再軍備を着々と進めている吉田茂内閣の文部科学大臣から受賞するというのは我々の立場から考えてどうかという意見が強くあつた。しかし、これに対しては、確かに純粹には気持ち良いものではないが、しかし戦争反対、再軍備反対の小説に対して授賞するというのはこれはまぎれもなく我々の勝利であつて妥協ではないことの証明にほかならないわけで、それ故受賞したが、読者からの共鳴も大きかつた。¹¹

十

次にエッセイ類について見てゆくと、この年、栄の生涯で最も大

きな影響を与えた二人の作家が相次いで急死した。一月二十一日には宮本百合子（51歳）が、六月二十八日には林芙美子（47歳）が死んだ。芙美子とは栄が一九二五年に上京して世田谷の太子堂に住んだ時、隣人として知り合って以来の友人で、西も東も分らない彼女に芙美子は茶碗の系尻でも包丁の研げることを教え、今川焼で食いつなく事を伝授し、体当たりで生きれば人生に不可能はないことを身を以て示してくれた先達であった。

百合子は無名時代の栄にとつては秘書兼家政婦の雇主として生計を支えてくれた恩人であり、文学を志してからは師匠として原稿の指導と発表誌の斡旋を親身になって世話してくれた忘れえぬ人であった。

従つてこの前後二人の作家についての追悼・回想は数多く執筆しているのだが、ここではその中から重要と思われる指摘を拾つておくことにしたい。

先ず百合子については、生涯師匠と弟子の関係、あるいは意識から抜け出ることではできなかったようで、林芙美子とのつきあいにしても叱られ、大田洋子から百合子に引き合わせてくれと強引に頼まれて紹介すべく案内して行った時も叱られて、師としての尊敬の念は変わらないが、親愛感が薄れてゆく淋しさがあった（「今は亡き人たち」¹²新全集に初収）と記し、戦時中はお米を三合ほど袋に入れ、牛肉を一切れもつて、数入りよと言つて泊まりに来たり（座談会 情熱の人 宮本百合子さん¹³ いずれにも未収）、去年の秋それは生前会つた最後の時になるが、訪問を喜び、「この顔をみてこれを切らずにいられよか」と中村屋の羊羹の包みを開いて歓待してくれた（「一枚の写真から」¹⁴新全集に初収）。また、その時には夕飯をご馳走になり、天ぶらの皿が配られると、百合子は黙つて箸を

とり、イカ天をとつて他のと代えてくれ、顔を見合わせると笑つた。それは栄が十八年前百合子の母の遺稿集の編集（「葎の影」として出版）の手伝いをしていた時に出版されたイカに当たつて七転八倒したことがあつてそれを思い出してくれたからであつたが、そういう細かいことも覚えていてくれる人であつた。また買物はてきぱきしていて迷いはなく、定価通り買つてまけさせるというようなことはなかつた。（「数入り」のことなど¹⁵単・作・新全集に収録）。もう一つ、百合子には直観的なものを言うことがあり、「口の大きい人は好きで、信用して」いて、今野大力がそうだつた。何某は口が小さいから信用できないと言明し、口の小さい右文を見て「困つたような顔」をしていたという（「小さな雑感」¹⁶新全集に初収）。

次に林芙美子についてはその文学の特徴を「庶民」と共に嘆いたり、悲しんだり、時には一緒に泥んこにもなつたり、それが彼女の「本領」であり、誰にも親しまれ、愛される「秘密」（林芙美子さんの人と作品¹⁷新全集に初収）があるとし、「林さんの死を悼む その文学の庶民性」（いずれにも未収）では更にそれを深めて「庶民といつしよにそこにすわつて涙を流している文学」であつてそれは「決して庶民を立ち上らせる文学ではなかつた」としてその文学の限界に厳しい見方と不満をつきつけている。「林芙美子さんの思い出」（「一本のマッチ」初収）「はたちの芙美子」（単・作・新全集に収録）は出会つた頃から晩年までの思い出を記すが殆どはこれまで知られたもので、新しくつけ加えられたものはない。

吉田茂内閣によつて再軍備の動きが着々と整備され、朝鮮戦争の始まったのが50年6月、自衛隊の前身である警察予備隊の創設が同年7月と、再び戦争の危険が迫ってきたのがこの年で栄は小説や児童文学で反戦平和を説くと共に、エッセイ等でも盛んに活動した。その主なものを次に紹介する。

長田新編『原爆の子』についての読後感をもとめられて栄は、ここにある四歳から中学一年までの被爆者の発言は人類の幸福と世界平和への願いをこめたものだけに是非世界中の人々に読んでほしい（『長田新編『原爆の子』ただ涙だけを流してはられない』²¹）いずれにも未収録）と訴え、「一本のマッチ」（単行本に初収・全・新全集に未収）では再軍備に反対し、戦争の惨禍を告発する一人の母として、戦争で父母を殺され、孤児となり、餓死寸前であった右文を何とか生き長らえさせることができた今、彼に向つて叫ぶ、右文よ、平和のために一本のマッチをすれ、一本の灯りをともせと。

また、徴用された沖繩の高等女学校生徒達の悲劇を描いた石野径一郎『ひめゆりの塔』（51・7・15 河出市民文庫）の解説には「平和への希い」（いずれにも未収）と題して反戦を説き、当時しばしばあった夫戦死の公報を受け、夫の弟と逆縁を組んで再婚した妻の前にもとの夫が帰って来て起こる「生還の夫に迷う妻」（いずれにも未収）の問題で栄はそういう逆縁の場合は、「一個の独立した女でなくて、家に所属した労働力にすぎない。だから、家に必要だから、その嫁さんを離さないで、弟とすぐ結婚させるわけ」だが、その際

に女性に必要なのは「家の結婚」ではなく、「自分の結婚」だといふ認識を強くもって「自主性のある結婚」をしてほしい。もっと言えば夫の葬式にはワンワン泣いて「一生操を守ります」といいながらその口も乾かぬうちに愛人が出来て熱烈な愛の生活を送る女性がいたら世間は爪はじきするであろうが、栄は「積極的な生活」であり、「再出発」という点で「立派だ」と評価する。

ローベルト・ノイマン著 阿部知二訳『ウィーンの子ら』をよむ²⁴（いずれにも未収）では戦争で父母兄弟を始め、一切を失った少年や少女達のむごい、過酷な現実を描いているが、これはウィーンだけではなく、戦争のある所、どこにでも生まれてくる子らのことであり、多くの人達に読んでほしいと推薦。

『基地の子』をめぐる『書評的座談会』、『日本の子供たち』、『子供の生活と大人の生活』²⁷（中教出版編集部長古川原との対談）の三篇（いずれにも未収）はいずれも話題の中心が既出の『基地の子』（清水幾太郎・宮原誠一・上田庄三郎編。この本は駐留軍のいる基地周辺に住む小中学生が今の日本や基地をどう見ているかについて書いてもらったもの千三百編の中から二百編を選んで編集したもの）を中心に展開されているので便宜上まとめて述べておくと、栄はこの書に強いインパクトを受け、基地の子は大人と違つてあきらめず、「現実を見つめ、不正なるもの、邪悪なるものに対して激しい抗議を投げつけている」とし、母親は子供の表だけではなく、裏も見抜かなくてはならない、というのは彼らは大人の裏をかくからで、そうでないとおいてゆかれる。また、「戦争玩具」は小さくなくてはならない。それから、子供の問題と大人のそれとは別ではなくて、つながっている。すなわち「アメリカさんに帰ってもらわなければ、これは解決し

ないとちゃんと結語を出している。「基地の子供たちは、朝鮮の戦争さえもやめて欲しいといっているのです」。

「子供を守ろう」(いずれにも未収)という座談会では、「あらゆる女性は母性たりうる」という持論を展開するとともに、それには経済問題がいつもついてまわる故に「子供を守るためには同時に母親も守らなくては母性的な愛情というものに花を咲かせることはできない」と強調し、「日教組教育新聞」(いずれにも未収)の座談会にも出席して、いわゆる教育の逆コースを批判しており、栄の三著(右文覚え書き・母のない子と子のない母と・二十四の瞳)をとりあげての座談会「この本を囲んで」(いずれにも未収)でも栄は同様に「逆コースに対してのレジスタンス」が三作執筆のモチーフにあることを繰り返し述べている。

「オール読物」(いずれにも未収)から「ソ連に希望をのべる」という課題を求められて、ソ連については何も知らないのだから希望など出せるわけがないが、しいて言えは「戦争など起こさぬよう、世界平和」への尽力を願うことであり、そういう「この小さな国の戦争ぎらいの女は、小さいながらも自分の力の限り、平和をのぞむ気もちで小説や童話を書いています」とおのれのスタンスをはっきりさせている。同様のことは「座談会 壺井栄さんに聴く」(いずれにも未収録、「不安の芽」(いずれにも未収)でも同様でここを先途という感じで反戦平和を説いている。

十二

一九五〇年(昭和25)からの戦後文壇へのカムバックは地味では

あったが着実であり、その年七月には「世界」から注文があった「わたし」を、「群像」に「棧橋」を書き、翌年には「週刊家庭朝日」から全19回の読切連載を依頼されて「私の花物語」という未知の鉱脈を新たに発見してそれを発表すると共に、その続篇を各紙・誌に連載して好評を博することもあった。

その間、受賞に関しては「暦」(40・3・9 新潮社)で一九四一年に第四回新潮社文芸賞を受賞して以来無縁であったが、「柿の木のある家」(49・4・20 山の木書店 九篇収録)が一九五一年(昭26)第一回児童文学者協会・児童文学賞(のち、日本児童文学者協会賞と改称)を受賞、続いて翌年、芸術選奨文部(科学)大臣賞を「坂道」(52・3・30 中央公論社 11篇収録)と「母のない子と子のない母」と(51・11・10 光文社)が受賞し、児童文学の世界での地位を揺ぎないものとした。しかし、「母のない子と子のない母」とそれに続く「二十四の瞳」(52・12・25 光文社)も共に栄にとっては殊更に子供向けに書いた童話という意識はなく、子供から大人まで誰にでも読んで楽しめる家庭小説といった趣の作品であって、そのことはデビュー作の「大根の葉」以来の言わば伝統であり、そこに栄の文学の一つの特徴があることは明らかであるが、世間の評価と栄文学の実態・本質との乖離は後にまた述べるが容易には埋められないものであった。

栄の名を不朽にした「二十四の瞳」(単・作・全・新全集に収録)は一九五二年(昭27)二月号から十一月号まで十回「ニューエイジ」に連載された。「ニューエイジ」はキリスト教系の家庭雑誌で連載のきっかけはかねて知り合いの著名な児童文学者坪田譲治の依頼によるものであった。その経緯については坪田自身書いたもの

もあるが、ここでは現在壺井家に残されている坪田自筆の栄宛紹介状があるのでそれによつてみると次のようになる。坪田の三男、理基男は入社早々「ニューエイジ」（この雑誌はキリスト教の伝道雑誌という大前提はあるが、実際は宗教色のすくない、品のいい清潔な雑誌であった）の編集にまわされたが、雑誌の編集経験などは初めての新米社員で一往六回程度の連載小説の企画は考えたが、さて誰に書いてもらうかという作家の人選の段階で考えあぐねてしまった。というのは、「ニューエイジ」は名のある雑誌ではなく、原稿料も十分なものとは言えず、締め切りも迫っているという悪条件が重なっていたからである。

それで父の譲治に相談すると「それは壺井栄さんが最適」ということで紹介状を書いてもらつて原稿を依頼に行き、執筆を快諾してくれた。

紹介状に記すところによれば当初「一回三十枚」、「一回から六回までの間」ということであつたようだが、十回連載に変わった。

挿絵は栄の希望で森田元子が描き、内容とマッチした郷愁をそそる美しい絵であつた。地味で特殊な宗教雑誌が発表舞台ということもあつて連載中は限られた読者層にしか読まれなかつたわけであるが、回を追うごとに読者から好評を博することになり、連載第三回目までは順調に進んだが、四回目の時に体調不良につき休載を申し出られて、大慌て、少し締め切りを遅らせて事無きを得たが、以後は毎回遅れがちでかなりきびしい催促をしなければならなかつた。後に栄は当時を回顧して「にじり歩くようにしてやつと書き上げた」と記すように難渋するが七月末頃には健康をとりもどし、前年同様信州の上林温泉、山の湯旅館にこもつてからは創作意欲が旺

盛となり、これまでとは逆に書けすぎて困る程で、「二十四の瞳」の最終回は遅くても八月二十五日までには書き上げて、九月一日からは連載完結後単行本として刊行する約束が光文社との間に出来ていたため、早速その清書にとりかかつている。

「清書」というのは厳密に言えば正確さを欠くので、冒頭から殆ど毎行改訂され、増補されているのが実態であるところからすれば正確には初版本の本文は初出の本文を全面的に改稿したものと云わなければならない。

問題はその結果である。この改稿によつて作品には如何なる変化が生じたのか。

それは改稿によつて付加された部分に顕著に出ているわけで、その最大のもは「赤い先生事件」、稲川先生がアカという名で治安維持法にかけられて教育界から葬られた事件である。大石先生はかねて稲川先生が指導した生徒達の文集「草の実」を読んでくれた指導の成果が現れている作文に感動してその中のいくつかを教室で紹介したこともあつたほどであるが、この事件をきつかけにして一挙に人々の意識、風潮は変わり、見ざる・言わざる・聞かざるといふ小心翼翼たる事大主義が支配的となり、戦争協力一色に塗りつぶされてゆく。その過程で稲川先生の動静を、スポット的に提示して片岡先生の取調や、稲川先生の獄中からの生徒への手紙が彼らに届かず、教師と生徒の間でも秘密をうかがい、探るようになっていくことや出所した稲川先生は復職できず、養鶏で細々と生きている姿などを点綴して軍国主義の跳梁する中での個人の生がいかに恣意的に翻弄されるみじめなものであるかを示している。

また、大石先生の父が小学校四年の時に受持の先生に誤解されて

激怒し、級友を誘って一日ストライキをし、更に村役場へ押しかけ、更迭を要求したというエピソードは、是非善悪をはつきりさせ、直情径行に突つ走る父の性格を示すものであると同時に、その血が娘の大石先生にも流れているものでもあることを語ってしよう。

第三に岬の子供たちと先生との再会を語るくだりで、時勢の変化について語り、三・一五事件、四・一六事件、満州事変、上海事変から思想の弾圧にまで及んでいることが示すように世の中の動静、時代背景を明確に作中に書き込んでいて、この作品は単なる超歴史的な童話というようなものではなくて、日本の戦前に起つたまぎれもない、歴史的な事実に基づいた小説であり、社会的な広がりをもつた現代小説だということである。

詳しくは後述するように「二十四の瞳」は初出誌の本文を全面的に改稿することによって、作者の反戦への意志、平和への志向がよく鮮明になったことは確かである。

大分紙数を費やしたので作品のポイントを整理して示すと次のようになろう。

作品は若い一人の女教師と十二人の子供たちの昭和三年から二十一年までの歴史を描いたものであり、作品の舞台も「農山漁村の名が全部あてはまるような、瀬戸内海べりの一寒村」とあつて特定されてはいない。この登場人物の無名性と場所が限定されないという点が大事なところで、これは戦前の貧しかった日本の地方に住む人々の姿であり、また都会に住んでいる大多数の貧しい庶民の暮らしとびつたり重ね合わされるといふことである。言いかえれば読者はこの作品の中に、自分たち自身の姿を見、感情を共有し、ささやかな喜びと大きな哀しみの中に過こしてきた激動期の歴史を確認すると

いうことが一つある。

戦前の庶民は農業や林業や漁業や、あるいは父や夫の稼ぎだけでは生活がなりたらず、内職や副業をすることでどうやらくらしをたてていた。だから大人も子供も皆働いて、仕事を分担することで一家が成り立っていた。作品ではヒロインの大石先生が働くのを初めとして、男も女も、大人も子供も、皆それぞれ家の仕事を手伝い、役に立っていて、遊んでいる者はだれもない。その点でこれは暮らしに向き合つて生きる庶民の文学であり、働く者の文学であると言つていい。

次に生きることに必死な庶民にとつて一家の柱となる働き手の父や夫を奪つ戦争ほど大きな敵はない。自転車に乗つて颯爽と登場してきたヒロインの大石先生も、戦争によって教育界からはじき出され、夫と娘と母を死なせ、二児をかかえて生活のために戦後再び教師として復帰するが、まだ四十歳であるにもかかわらず、その時には「老朽」のレッテルを貼られた「助教」であり、「臨時教師」というみじめさである。

また、岬の教え子の五人の男子のうち、三人は戦死し、一人は生還はしたものの、失明という悲惨な状況にあり、戦争は人類に不幸しかもたらさないという反戦平和の主張は、理屈や観念としてではなく、個々の人物の描き方を通して全篇にみぎきっている。

このことにかかわつて次のようなエピソードが残されている。昭和三十一年（一九五六年）十一月十日に、大石先生と十二人の子供たちを彫つた「平和の群像」が小豆島の土庄町にできた時、栄は招かれて除幕式に出席した。招待者は三百人、参列者は三千人という盛大なもので、主賓としての挨拶を求められた栄はこれを拒否するといふハプニングがあつた。

理由は台座の字を揮毫したのが総理大臣で再軍備支持者の鳩山一郎であることに不満だったからだ。あわてた主催者側がとりなして、何を話してもよいという条件で折り合いが付き、栄は最初にはつきり不満を述べ、反戦平和を願う気持ちを参列者に訴えた。

大石先生が生徒達の心をしっかりとらえたものに音楽がある。生徒の一人マスノは音楽に生きることをめざすほどになるのだが、これは当時の学校音楽ではなくて、大正期に起った自由主義者の中から生まれてきた新しい童心主義の音楽であり、唱歌であった。おそらく栄は音楽におけるこうした新しい動きをすぐれた音楽教育の指導者でもあった兄の弥三郎から示唆され、それを積極的に受けとめていったものと思われるが、それにしても栄のこの炯眼には驚くほかはない。

「六月夜の蟹」には小林多喜二の虚殺のことが出てくるが、栄は仲間の一人として実際にその遺体を清めている。

そういう辛い体験がここには至る所にちりばめられているが、しかし読後にやりきれない、じめじめした暗さは残らない。それは庶民の生きる知恵である。栄の母は、明日は明日の風が吹くがモットーであったというが、栄自身にも受け継がれたそういう楽天性や登場人物たちの発するユーモアによるところが大きいのであろう。

大石先生の魅力はどこにあるかと言えば、何と言ってもその豊かで広い母性愛にあるといつてよいであろう。子供たち一人一人に寄せる愛情の深さは教師と教え子の師弟愛というレベルをこえて、母親が子供のゆくすえを慈愛の心で生進いとおしみ続ける大母性といったものを思わせる程である。

これに関連して大石先生批判、あるいは不満があるようだ。作品

の冒頭で、洋装の、自転車に乗った新しい女性として登場した彼女が時代に流され、はじき出されて泣くだけの女になっているのはどうしたことかというのだが、これに対しては最終章「十 ある晴れた日に」彼女が二人の子を連れて歓迎会に行く場面のやりとりを思い起こしてもらえば、彼女の若さのよみがえり、澀刺ぶりは了解してもらえらるであろう。

ただし、はっきり言えば大石先生は理想的にきつちりした近代的洗礼を受けて自立した存在ではない。困難な状況に直面すれば、それといかに向きあつて状況を打破するかを考えるのではなしに、すぐに涙ぐみ、泣き、それに背を向け、尻尾を巻いて貝のように黙って逃げてしまうタイプである。したがってその点ではいわゆる「新しい女性」などではないのだから、あまり買いかぶらない方がよいようである。逆に大石先生が「新しい女性」ではなく、慈母のように全てを受け入れて泣いてくれる故に憧れの対象になっているとも言えるのである。

モデルについてはこれまでもいろいろ指摘があるが、まだ誰からも指摘されなかったことのないモデルを一人紹介しておこう。それは「八」の冒頭に出てくる大石先生の亡父嘉吉^{かきち}。先生は父の旧友の船乗りから、若い時に二人は外国船に乗ってアメリカに渡り、シアトルにも行った時に海へ飛び込んで密入国して一旗あげようともくるんだこともあつたと聞かされるが、このアドヴェンチャーをこの通りそっくりやった人物が栄の身近にいた。夫繁治の兄嘉吉である。その名前までそっくりもらっている所には栄のユーモアがあるが、義兄は首尾よく密入国したのち雑貨商として成功し、市民権をとり、故郷の小豆島坂手から妻を迎えて二人の子に恵まれ、戦前、戦後と日米

を往反し、親しく交際した。特に戦後の窮乏期には数多くの物資を送られて助けられた。(この章完)

* 本稿の年月の表記は原則として西暦とし、最初の二桁(19・20)を省略している。

* 作品の収録状況を示す略称は次の通り。

- 単行本 作 筑摩書房版壺井栄作品集全25巻
- 全 筑摩書房版全集全10巻 新全集 文泉堂版全集全12巻
- 児文全集 講談社版壺井栄児童文学全集全4巻

注

- 1 のち「楡」と改題されて以下の諸本に収録。「続私の花物語」(55・8・25 筑摩書房)、「壺井栄作品集10 私の花物語」(56・12・5 筑摩書房)、「新女苑」(57・4 再録)、「いのちかなし」(60・5・31 新潮社)。しかし改題の理由について検討してみると、第一にもともとは「続私の花物語」に収録するための便宜的処置にすぎないこと、第二に「羽ばたき」の方がヒロインの積極果敢な行動力をより適切に表現していることから、あえて初出のままとした文泉堂版全集の方針を支持して、初出のままとした。
- 2 栄「小さな足あと(あとがき)」(65・10・30 「壺井栄名作集3 おかあさんのこのひら」ポプラ社)。
- 3 初出原題は「白いりボン」で、「あしたの風(創作・随筆集)」

- (53・1・20 全日本社会教育連合会)に初収の際は初出のままであるが、「私の花物語」(53・6・5 筑摩書房)収録時に「羽ばたき」同様便宜的に「楓」と改題された。しかし「羽ばたき」同様旧題の方が印象鮮やか故、あえて旧題のままとした文泉堂版全集に従った。
- 4 表2に示したように実際は20回ではなく、19回である。
- 5 栄「モデル」ということ(あとがき)(65・10・30 「壺井栄名作集5 母のない子と子のない母と」ポプラ社)。
- 6 前回の宿は林芙美子の夫緑敏から紹介された塵表閣であったが、今回はその親戚が営む小さな宿、山の湯旅館を紹介されて滞在した。静かで大いに仕事がかどり、気に入って以後軽井沢に別荘をつくるまで夏は定宿とする。
- 7 拙稿「壺井栄論(19) 第八章 敗戦の混迷の中で(前篇)」(08・3・20 「都留文科大学研究紀要67集」)。同じく拙稿「壺井栄 その生涯と「母のない子と子のない母と」をめぐって」(04・10・1 小学館文庫「母のない子と子のない母と」参照。注5に同じ)。
- 8 注5に同じ。
- 9 注5に同じ。
- 10 坪田譲治「母親の肌ざわりを読む」(67・5・10 旺文社文庫「母のない子と子のない母と」)。
- 11 栄「私が世に出るまで」(54・1 「新女苑」)。
- 12 66・10 「群像」。
- 13 51・4 「新女苑」(出席者は栄・佐多稲子・湯浅芳子・粕谷正雄)。
- 14 51・4 「新日本文学」。

- 15 51・5・30 宮本百合子追悼録編纂会編「宮本百合子」岩崎書店
- 16 54・6・10 「多喜二と百合子」4号。
- 17 51・6・30 「東京新聞夕刊」。
- 18 51・7・8 「婦人民主新聞」。
- 19 51・8 「文芸」。
- 20 54・2・15 「現代日本文学全集45 月報7」筑摩書房。
- 21 51・11・15 「東京大学学生新聞」98 100合併号。
- 22 平塚らいてう・榎田ふき監修「われら母なれば 平和を祈る母たちの手記」51・12・28 (青銅社・書きおろし) に収録。この本は夫や子供を戦争で亡くした未亡人や母たちが、戦後の苦境を必死に生きてゆく中で、再びしのびよる戦争の影に対して、再軍備反対、戦争はいやだと身近な生活の中から反戦平和の声をあげたもので、20名をこえる無名の人達の手記と、栄・柳原白蓮・若山喜志子・佐多稲子・平塚らいてう(まえがき)・榎田ふき(あとがき)らの文章が収められている。
- 23 51・9 「婦人公論」(座談会 出席者 田村秋子(俳優)・栄・古谷綱武(評論家))。
- 24 52・12 「図書」。
- 25 53・5・4 「産業経済新聞」(座談会出席者 栄・古谷綱武(評論家)・鍛冶忠(日販仕入部長)・上田庄三郎(編者・司会))。
- 26 53・6 「改造」。
- 27 53・8 「新しい生活」(中教出版刊 8巻8号)。
- 28 52・8 「婦人公論」(座談会出席者 長田新「広島大教授」・「子供を守る会」会長・清水慶子「同上会委員」・高見順・栄・羽仁説子「同上会副会長」・周郷博「お茶の水女子大教授」)。
- 29 53・3・20 「教育に対する文学者の発言」(出席者 中島健蔵・中野重治・椎名麟三・栄)。
- 30 53・2・14 「図書新聞」182号(出席者 石井桃子・滑川道夫・栄)。
- 31 「ソ連に訊ねたいこと」54・1 「オール読物」。
- 32 54・4・6 「朝日新聞(香川版)」(出席者 栄・前川とみえ「県議」他八名の香川県の女性たち)。
- 33 54・7 「文学界」。
- 34 のち誌名が「月刊キリスト」と改題。発行はニューエイジ社。発売は教文館・毎日新聞社。
- 35 昭和26年(一九五二)10月25日付栄宛坪田讓治書簡(本人持参のものだが書簡の形式をとっている)。他に坪田理基男「二十四の瞳」の思い出(壺井繁治他編「回想の壺井栄」73・6・23 私家版)も参考にした。
- 36 栄「腫れ」(57・1・15 「壺井栄作品集9 二十四の瞳」筑摩書房)。
- 37 昭和27年(一九五二)8・27日付壺井真澄宛栄書簡参照。
- 38 56・11・11 「朝日新聞 香川版」は「壺井女史の話」として抄録した中に「書いてもらった方がふさわしかった人」として「南原繁」(香川県生まれ。元東大校長)の名をあげている。同様に薄井八代子「壺井栄先生の思い出」(66・6・26 「四国新聞」)も南原繁の名をあげている。